

# 琉球大学学術リポジトリ

## 潮音詩社同人・森山静子の短歌： ハワイ沖縄系移民主婦の生活詠歌

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄移民研究センター 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 仲程, 昌徳, Nakahodo, Masanori メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24564/0002010097">https://doi.org/10.24564/0002010097</a>

## 潮音詩社同人・森山静子の短歌 —ハワイ沖繩系移民主婦の生活詠歌

仲 程 昌 徳

- |                      |                 |
|----------------------|-----------------|
| I. はじめに              | VI. 潮音詩社への入社    |
| II. 新聞への初登場          | VII. 潮音詩社の活動    |
| III. 新聞への投稿          | VIII. 『レイラニ』の刊行 |
| IV. 切り抜き帳に見られるペン書きの歌 | IX. 詠草掲載の休止     |
| V. 潮音詩社入社まで          | X. おわりに         |

### I. はじめに

ハワイの邦字新聞『布哇報知』『布哇タイムス』二紙は山峡短歌会、コナ銀雨詩社、潮音詩社といった短歌結社の詠草を毎月掲載していた。潮音詩社の月例詠草もほぼ一月遅れで毎月二紙に掲載されていたが、その中に比嘉静観、大嶺真鶴、森山静子、安慶名良信といった沖縄出身者の名前が見られた<sup>1)</sup>。

比嘉静観は、潮音詩社だけでなく他の結社でも活動し、数冊の著作もありその名は広く知られていた。大嶺真鶴も同じく潮音詩社だけでなく他の結社にも属し長い活動歴を有していた<sup>2)</sup>。安慶名良信には手作りの私家版『歌集』があった。彼はまた敗戦直後の沖縄救援活動、とりわけ沖縄への豚輸送等で知られていた<sup>3)</sup>。

森山静子も、投稿歴からいえば決して短くはない活動歴があった。

森山が、潮音詩社へ入会したのは五〇年代の末になってからである。発足メンバーの一人であった比嘉静観は別格として大嶺真鶴よりもかなり遅れての入会であったといえるが、入会後は、娘のお産のためハワイを離れてロスアンゼルスに滞在していた一時期および夫の看病に明け暮れた期間を除いて、ほとんど休むことなく月例の短歌会に出席し、詠歌を提出していた。

森山の作品は、『レイラニ』及び『レインボー』といった潮音詩社合同歌集にも収録されていて、その一端を知ることができる。そして、森山作品の評価ということでは、その一例を「新年応募」作品に求めることができる。

『布哇タイムス』『布哇報知』二紙は、毎年新年一月元旦には「新年応募」作品として短歌、川柳、俳句などを掲載していた。短歌では天地人、五客、十秀等にわけて掲載しているが、「新年応募」作品を見る限り、森山の作品は、天地人、五客というまでもなく十秀にもとられた形跡がない。森山の歌は、上位を占めるほどのものではなかったのである。歌としての

完成度ということでは「新年応募」作品がそうであったように、高い水準にあると評価できるほどのものではなかったと言っているだろう。

森山自身も、自分の歌が決して完成度の高いものではないことをよく知っていた。それでいながら、歌を捨てることがなかった。

森山の歌の特質は、技巧の問題などと無関係に、日々の出来事を取り上げて懸命に歌っているところにあった。

森山が、ハワイに渡ったのは、一九一八年。呼び寄せ花嫁としてである。そして戦後すぐから、新聞への投稿を始めていた。投稿された最初の作品は、しかし短歌ではなかった。森山がいつ頃から短歌を始めたのかははっきりしないが、一九五〇年一月一日付き『布哇タイムス』に「道遠し」の題で四首の歌が掲載されている。

森山の歌が毎月新聞に出るようになるのは、潮音詩社に入会して以後のことである。入会後の作品が入会前の作品よりも多くなったのはそのためだが、前後いずれの作品も、家事や臨時仕事をこなしながら僅かな暇を見つけて詠まれたものであったことだけは間違いない。新しい土地で根付くために懸命に家計を支え、守っていこうとした中から生まれてきた歌、一人の沖縄系主婦が残した数多くの生活詠歌は、歌としての高い評価は得られなかったとはいえ、忘れ去られていいものではないはずである。

## Ⅱ. 新聞への初登場

一九四七年八月二十一日、『布哇タイムス』は、「私の念願が通りました」と題した、一通の投書を掲載していた。それは次のようなものである。

拝啓 私は約一ヶ年前八、九月頃布哇タイムスに『夕暮に母を憶ふ』といふ詩のようなものを唯母恋しさの余り書き連ねて投書しましたものゝ、あまりの恥しさに後から後悔致して居りました処十一月頃『夕暮に母を憶ふ』と出て居るではありませんか、身を小さくして読んで居りますとご親切にも沢山御筆を入れられ立派な詩になって其の上長々しいものを尊い紙上にやさしく御指導下さいました御厚意の嬉しさとても貧しい私の文筆で表現の致し様も御座いません。

でも是非御礼をと申して居ります内私には又嬉しい出来事が御座いました、あの詩で書いた通り私の願ひ、私の思ひが御神仏様の御加護で通ったのでしょ、間もなく永い年月案じる母様の御無事が妹の便りで分り又身内の者も助かって居るとの事、其の時の嬉しさ御察し下さいませ、又娘の友人が母の現住所より一町もない処に進駐軍として務めて居る事も分りそれよりは手紙のやり取り、写真の行来と又小包は送るやらで実に嬉しい忙しさ、又昨年末に長男が進駐軍として日本に行き今年の六月には母や親類に私の代り面会はするし、嬉しい事が次から／＼此の頃の私は幸福そのもので

御座います

これと言ふのも布哇タイムスの取持のやうな気がしてなりません，思ひまするに何事も念ずれば必ず通ずると言ふ信念をもつようになりました

あまりの嬉しさに拙文拙筆もかへり見ず先づは御礼申上げる次第であります  
ではご免下さいませ

八月十八日 ホノルルのすみにて 静子

布哇タイムス記者様

『布哇タイムス』は、十八日に書かれて送られてきた森山の投書を、二十一日には掲載していた。すばやい対応であったことがわかるが、森山が『布哇タイムス』に投稿した「詩」は次のようなものであった。

**夕暮に母を憶ふ**

音信絶えて幾年か  
生死の程も分たねば  
母よ恋しと仰ぐ空  
淡濃の雲が流れ行く

雲の流れにふと描く  
古里の河原なつかしや  
乙女の夢を抱きつゝ  
夕べにめでし月見草

四十路を過てふりかへる  
我が来し方の浮き沈み  
あはれ河原の月見草  
はかなき さまに 似たらずや

流るゝ雲の絶え間より  
ふと現れて笑み給ふ  
母の面影月のまみ  
矢張りあの日の若い母

今は何処に在すやら  
つむる臉に浮びくる  
私を胸に抱きしめた

母のあの日のあの姿

母の慈愛のふところに  
抱かれてあるは吾かはた  
吾が児かしらず双腕に  
しっかりと胸に抱く吾が愛児

母のさだめの悲しさよ  
いとし吾児をしつかりと  
胸に抱けば過ぎし日の  
母の面影よみがへる

音信しらぬ母上よ  
たゞすくよかに在しませ  
天つ御神よ守りませ  
雲へよも伝へよこの思ひ

「夕暮に母を憶ふ」が掲載されたのは、一九四六年十一月二十一日である。

『布哇タイムス』が、投稿されてきたこの「詩」を掲載したのは、それが、文句なく優れていると思われたからではなかろう。詩は、その措辞から分かる通り、明らかに初心者によって書かれたものであった。いわゆる文芸愛好家の習作だと知りながら掲載したのは、そこに間違いなく人の心を打つ思いが溢れていたからに違いない。森山静子の新聞への初登場を飾った作品は、故郷の母の生死を未だ知ることの出来ない寂しさを歌ったものであった。

地上戦で、沖縄が壊滅したこと、玉砕を報じられていたこと等で、森山は、母の安否を案じながらも、それを確認する手だてを欠いていた。それは一人森山だけでなく、沖縄出身移民たちに共通して見られた不安だったであろう。森山の詩は、そのような思いをなんとか表そうとしたものとして、受け止められたのである。

「夕暮に母を憶ふ」を投稿したあと、森山は、自作の幼稚さを顧み「あまりの恥ずかしさに」後悔する。しかし、それが掲載されたことで「身を小さくして読んで」とみると、「沢山御筆を入れられ立派な詩になって」いた。「唯母恋しさの余り書き連ね」たものが「立派な詩」になっていたことで森山は喜ぶが、それにもまして嬉しかったのが、母の無事を「妹の便り」で知ったことであった。

「私の念願が通りました」には、母も親類縁者も無事だったことを知った喜びとともに、「娘の友人が母の現住所より一町もない処に進駐軍として務めて居る事」、写真、小包など

が送付出来るようになったこと、また「長男が進駐軍として日本に行き今年の六月には母や親類に私に代り面会」することが出来たといったことなどが書かれていた。森山はそれを、『布哇タイムス』が「夕暮に母を憶ふ」を掲載してくれたおかげだと感謝したのである。

### Ⅲ. 新聞への投稿

森山の作品が最初に新聞に掲載されたのは、一九四六年十一月二十一日。戦後間もない頃であった。そして、母の安否を案じた作品が機縁になったとして感謝の手紙を投稿、それが掲載されたのが翌一九四七年八月であった。森山の新聞への投稿は、戦後のきわめて早い時期から始まっていたのである。

「私の念願が通りました」が掲載された後の一九四八年から五七年までのほぼ十年間にわたる投稿の詳細については、これからさらに調査しなければならないが、森山は、「折々の歌集 思出のしほりともなりせば 静子」と記した新聞切り抜き帳を残していた。森山の切り抜き帳を見て行くと、「沖繩より慶祝」と題された文章に短歌二首<sup>4)</sup>を添えた作品の切り抜きから始まっている。その次は「亡き友を憶ふ（三首<sup>5)</sup>」「夫婦・ピクニック（六首<sup>6)</sup>」「ケアウモク街（一首<sup>7)</sup>）」の切り抜き三つが同じ頁に貼られていて、それぞれに「与那原御夫妻の死を悔しむ」「戦後初のピクニック」「一九五三年新年号」のペンによる添え書きが見られる。そしてその次の頁には「道遠し（四首）・走る（三句<sup>8)</sup>」「歌日記（三首<sup>9)</sup>）」の二つが貼られている。

最初に貼られた切り抜き「沖繩より慶祝」は、新年の挨拶とともに「移民七十五周年と沖繩移民六十年」を迎えたことを祝したものであること、また同面に見られる広告に「祝 沖繩移民来布六十周年」の文字や、静子の「草分けの困苦の足跡輝きて寿ぎ祝ふ七十五年史」一首から、一九六〇年に祝われた「沖繩移民来布六十周年」及びハワイ移民「七十五年」にちなんで投稿されたものであったことが分かる。また同歌は、一九六〇年一月一日新年応募作品として『布哇報知』にも掲載されていて、一九五九年に作られ投稿されたものであることも分かる。「沖繩より慶祝」の次の頁に貼られた「ケアウモク街」の住所で掲載された一首も、一九五三年一月一日新年応募作として掲載された一首であった。「道通し」も同様に一九五〇年一月一日に掲載されていた。

「沖繩より慶祝」から「道遠し」までの切り貼りから分かるとおり、切り抜き帳に貼られた切り抜きは、発表順に並べられていたのではなかった。さらに、切り抜きの前に記されたペン書きの記入も、作品の発表された年月日とは必ずしも一致してはなかった。切り抜き帳は、そのように発表順でもなく、また切り抜きの前に付されたペン書きの書入れも必ずしも正確ではなかったが、森山が、潮音詩社に入会して作品を発表するまで、どのような作品を投稿していたのかが一応分かるものとなっている。

切り抜き帳に貼られた「道通し」「歌日記」以後の切り抜きを順に並べていくと、

- 1 「入院中の歌日記<sup>10)</sup>」(「一九五三年四月初旬大手術受く」のペン書きあり)
- 2 「五十過ぎてからビジネスに入る歌」(「一九五一年八月二十五日」のペン書きあり)
- 3 「歌日記<sup>11)</sup>」
- 4 「消え行く 古都、首里の名よ<sup>12)</sup>」
- 5 「敬愛する真鶴様<sup>13)</sup>」(「一九五〇年十月布哇タイムス紙上にて」のペン書きあり)
- 6 「古里に泣く<sup>14)</sup> 女浦島」(「一九五五年戦後の古里を訪ねて」のペン書きあり)
- 7 「溪芳先生の死を悼む<sup>15)</sup>」
- 8 「多彩な記事を喜ぶ<sup>16)</sup>」
- 9 「箱根曾遊<sup>17)</sup>」
- 10 「六十年に因んで六弗の祝意 マキキ静子さん」
- 11 「旅の歌日記<sup>18)</sup>」
- 12 「短歌 折々のわが姿<sup>19)</sup>」
- 13 「木村捨録氏来布記念 布哇短歌大会詠草」(「一九五八年八月五日」の日付あり)
- 14 「潮音詩社 十月詠草<sup>20)</sup>」(「一九五八年十一月十八日」の日付あり)
- 15 「さくらも満開<sup>21)</sup>」
- 16 「祝ハワイ立州<sup>22)</sup>」「折々の歌<sup>23)</sup>」(両切り抜きのあいだに「1969～1970 夫病む 豊平氏より送りなさる」のペン書きあり)
- 17 「ハワイ第二回短歌大会入選歌」

となっている。

17の次の頁からは一九七二年四月二十一日に掲載された「潮音詩社二月詠歌」をはじめ「潮音詩社」詠草の掲載紙の切り抜きが、掲載年月日順とはおよそ無関係に貼られている。

#### IV. 切り抜き帳に見られるペン書きの歌

自作の掲載された新聞を切り抜いて貼り付けた「新聞切り抜き帳」には、切り抜き以外に数多くの自作が書き込まれている。「切り抜き帳」に書き込まれた最初の自作は「一九四六(年)九月布哇タイムス紙上に」として、先に紹介した「夕暮に母を憶ふ」だが、それは次のようになっていた。

夕暮に母を憶ふ  
音信絶へて幾年か生死の程も分たねば  
母よ恋しと迎ぐ(仰ぐ)空  
淡濃雲が流れ行く

雲の流れにふと描く古里の河原なつかしや  
乙女の夢を抱きつゝ  
夕べにめでし月見草  
四十路を過ぎてふりかへる  
我が来し方の浮き沈み  
はかなきさまに似たらずや  
流るゝ雲の絶え間より  
ふと現はれて笑み給ふ  
母の面影月の間見  
矢張りあの日の若い母  
今は如処（何処）にお在すやら  
つむる臉に浮びくる  
我を胸に抱きしめた  
母のあの日のあの姿  
母の慈愛のふところに抱かれし吾が又  
双臂にしっかりと抱く吾が愛児  
母のさだめの悲しさよ  
いとし吾が子をしっかりと胸に抱けば  
過ぎし日の母の  
面影よみがへる  
音（訪）ずれ知らぬ母上よ  
たゞすぐよかに在しませ  
天津御神よ守りませ  
雲も伝へよこの思ひ

（カッコ内は引用者）

森山が「夕暮に母を憶ふ」の前書きに「一九四六（年）九月布哇タイムス紙上に」と書いている「九月」は「十一月」の間違いであった。「切り抜き帳」は、掲載された月ではなく、投稿した月を記載していたのではないかと推測されるが、「切り抜き帳」に書き込まれた詩が、どのように手直しされて新聞に掲載されたのかがよく分かる一例である。

「亡き友を憶ふ」他二つの切り抜きは、「夕暮に母を憶ふ」の次の頁に貼られていた。「夕暮に母を憶ふ」の次にみられる書き込みは、2「五十過ぎてからビジネスに入る歌」（「一九五一年八月二十五日」のペン書きあり）の後の頁にあって「一九五二年大学卒業と同時入営」の前書きがあり、「折々の歌」と題して、

生活に感謝しつゝも時折に吐くため息に何か淋しく  
ようやくに学なり卒へて巣を立てどアंकロサムに召され去り行く  
ヒナ鳥は次々巣立つ羽ひろげ安ろけき中にも秋風ぞ吹く  
世の動き今日は如何にと案じつゝ武運祈りて憂ふかみ行く  
あれ嬉し休戦調印済むと聞く愛子無事に帰る日楽し  
休戦を永久の平和に成し給へ世界の母祈りなりせば

といった歌が詠まれていた。「折々の歌」の次の頁には「一九五三年」として、次のような歌が見られる。

趣味事に忘んものと一瞬を通ふ御花に心なごみぬ  
いたつき  
生活に感謝し得ぬ恥かしさ知りつゝ又も愚痴のくり事  
ビジネスの一途に生きる背の君を足らぬ気もせばすまぬ気も又  
何事もあきらめ行かん愛し子の幸を祈りて生る母我は  
篤農生青年を迎へて  
篤農の若者迎へ同胞が集い励ます意義ある夕べ  
若者に望みをかけて祈るらん我が故里に幸ある春を

「一九五三年」に続く頁には、「俳句」として、次のような作品が並んでいる。

小鳥来て春を告げてるマンゴ木に  
コンアカネ  
黄色夕日煌やく島の春空  
島の春オヒナ出て知る常春の島  
コン  
黄色の朝日に浮ぶ島の春  
一九五四年の新年号俳句入選  
一九五六年

久しくに打すておきしノートブック又取り上げて学ぶ此の頃  
我が務めかろくなりなる老の身をせわしく生む意義深く  
現世に永ろへるまわ励みなん趣味にたしなみ祈る気持で

「一九五六年」の三首のうちの一首「現世に永ろへるまわ励みなん趣味にたしなみ祈る気持で」は、一九五九年十月十五日付き『布哇タイムス』に掲載された「潮音詩社 九月詠草」にみられる。「一九五六年」に詠まれていたとすると、三年後の発表ということになる。「俳句」の次の頁は、3「歌日記」の切り抜きが貼られている。切り抜き頁と書き込み頁との間には、何らかの法則性があったようには見えない。

3「歌日記」の次の頁には「一九五四年五月九日」として、次のような歌が書き込まれ

ていた。

悔いだるゝ嬉かるべき母の日につむじまがりてさえぬ一日  
母の日になぜかいだたつ思する老いし母君なにがあるらん  
集いよる子等にすまぬと思へども晴れぬ心を我れにくみつゝ  
朝と嫁カアドたに送り来ぬ日々うとくなり行く心淋しく

新年号

一つ木に色々とり＼／の花咲けり平和布哇の<sup>スガタ</sup>象徴にも似て  
川柳 出世して親子の縁が遠くなり  
庭内の鉢の植木が咲き揃い色とり＼／の美しさ見入る

「一九五四年五月九日」の次の頁は、4「消え行く 古都、首里の名よ」、5「敬愛する真鶴様へ」の切り抜きが続き、その後、「琉歌布哇首里婦人会歌」として

布哇首里婦人ちむ揃い揃るて新玉の年に御祝さびら  
リイタリいたすよう歌やびら子孫ぬ繁昌にがとうて  
いちたらんことやちゆいたれいたれい心うちはりて笑いふくい  
りたいしゆよう歌やびら子孫ぬ繁昌にがとうて  
一九五〇年  
我が婦人会の歌

が書き込まれていた。森山は、詩や俳句、短歌だけでなく琉歌も作っていたのである。次の頁には「一九五五年三十六年振り帰島」として

久しきの願叶ひて今日我は船出しにけり瑞穂の島へ  
ドラの音に名残を惜むバイ＼／を後に聞きつゝ大海原へ  
同船のよしみ親しく語り合思出とならむ幾年の後  
姦ましや様々の方言入りみだれ旅の疲れに心いだたつ  
里知れる人さま＼／の振舞に人のふり見て我が身修めむ

といった歌があり、次の頁も「一九五五年古郷に帰り」として、

今の世は人の情もうすらぐと言へどやさしき人に逢たり  
古里の山河に湯にひかれつゝハワイの夜の夢はるかなり  
すごやかに母君在さば安らぎぬ老いし吾娘と母は嘆きて  
願望の母に目まいて思なし子にも嫁にも逢つて嬉しく  
蓉子さんへ

おばあちゃまと声もやさしく親しまれ永久に忘れじ君がいたわり  
歌詠めば心もなこむ晴々と趣味に生く幸感謝捧げん

といった歌が並ぶ。さらにその次の頁も「一九五六年」として

あっけなく別とび行く飛行機よ恙なく行けと祈る母我は  
孫達の姿ちらつく朝夕に思に沈み今日も暮れ行く  
ありあまるバナゝ手にして思はるゝ日本に去りし孫の果物  
平和なる園に嵐を巻き起こし跡に泥つき老木ぞ悲し  
育つ子は永久に我がものならざるにはなれ行く子に哀惜ぞ悲し  
朝餉する窓に青空晴れ渡り銀色の飛行機雲間ぬい行く

と、「再渡航」した時のことを詠んだ歌とともに、孫との離別を詠んだ歌が続いていた。「一九五六年」の最後の一首「朝餉する窓に青空晴れ渡り銀色の飛行機雲間ぬい行く」は、一九五八年一月一日の『布哇タイムス』「新年応募作品」に採られていた。

「一九五六年」の次からは、6「古里に泣く 女浦島」（「一九五五年戦後の古里を訪ねて」のペン書きあり）、7「溪芳先生の死を悼む」、8「多彩な記事を喜ぶ」、9「箱根曾遊」、10「六十年に因んで六弗の祝意 マキキ静子さん」、11「旅の歌日記」、12「短歌 折々のわが姿」と切り抜きの貼られた頁が続いている。12「短歌 折々のわが姿」の次の頁は「五月詠歌兼題（願）」として

願望の立州なりて島民の歓喜漲るパラダイス布哇  
新年 民主主義象徴しめさる若き皇子の瑞穂の国はいや栄えらん  
永久しえの御繁栄結ばる吉田かな祝い奉らん遙かの布哇  
盆栽の石岩山になぞらへて眺め居る夫の瞳は静かなり  
盆栽のブゲンベリヤ形よし紫の花にやさしさを副へ

の歌が並んでいる。「願望の立州なりて島民の歓喜漲るパラダイス布哇」の歌は、一九五九年五月十五日付け『布哇タイムス』に掲載された「四月詠草」に見られるものである。「五月詠草」は、五月二十六日に掲載されているが、そこに見られる森山の歌は「初夏のマキキ・タップは清々し眼にしむ青葉香ほる花々」というものである。ちなみに同年六月二十七日付け『布哇報知』に掲載された「五月詠草」（『布哇報知』は「六月詠草」としているが誤植にちがいない）に見られる森山の歌は「行きずりの後姿に記憶あり追憶に消ゆる人込みの中」である。

「五月詠歌兼題（願）」の次の頁は、13「木村捨録氏来布記念 布哇短歌大会詠草」（「一九五八年八月五日」の日付あり）、14「潮音詩社 十月詠草」（「一九五八年十一月十八日」

の日付あり）、15「さくらも満開」と続き、その後の頁には、明らかに別紙とわかる用紙に書かれていた歌が、切り取られて貼られている。別紙に書かれた歌は、三頁にわたる。その一ページ目には「一九五九年ロス行き留守中に夫が初めての作歌記念とする」として

新しき年を迎へし我妻よ何事帰るやら脂（指）を数へて待ちならん 朝申

という歌が見られる。二ページ目の切り抜きには、「一九五九年ロス市にて同郷の友十名様御集まり下さった時の記念作歌」とあって

上江洲芳子

美しき □□ 日の集ひよパラダイスの島より来たる友を迎へて（□は不詳箇所以下同）

喜舎場 □□ 子

外間トミ子

三頁めには、

旅して道づれ世は情け 平敷 俊

とあるのが見られる。

三頁目の次の頁には16「祝 ハワイ立州（二首）」「折々の歌」の切り貼りがあり、その後の頁に「五月兼題（後）」として

行きずりの後姿に記憶あり戸惑いに消ゆる人込みの中

後よりやさしく肩を抱かれし追憶遙か忘れがたなく

雑

充ち足りた生活し明るし鼻歌で家事にいそしむ白老婦人

雨の日は夫の手すさび三線きゝつ歌書く我的心ゆさぶる

平凡な夫の豊かな愛に生く老妻の座に足りて幸なり

朝々に小鳥の合唱窓の辺に強く生きよと今日も励ます

平凡な夫にしあれとその愛に老妻の座に足り居る（みせけち）

雪露れ降りしきるがに小花ちり白き細道清しく過ぎぬ

の歌があって、「新聞切り抜き帳」に書き込まれている作品は、それで終わる。一首目の「行きずりの後姿に記憶あり」の歌は、「一九五九年六月詠草」に、最後の「雪露れ降りしきるがに」の歌は、「一九五九年、八月詠草」にとられているものである。

「新聞切り抜き帳」に書き込まれている歌のなかには、新年応募作品として掲載されたものや潮音詩社詠草に見られるものなどがある。書き込まれた歌から、一九四八年以降ど

のような歌を詠んでいたかが分かるだけではない。そこには息子の大学卒業、入営、休戦条約締結、趣味の生花、農業研修生の歓迎会、勉強への意欲、訪ねて来なくなった息子と嫁、首里婦人会の新年会、故郷への船旅の日々、故郷の風景、母との再会と別離、日本へ去った孫、ハワイの立州、日本の皇子の来布、夫の趣味そして夫との和やかな日々等々が詠まれていて、移民一世の生活がよく分かるものとなっていた。また、歓迎会や新年会を歌った歌からは、沖縄系移民たちが故郷との繋がりをいかに大事にしていたかが伝わって来る。

## V. 潮音詩社入社まで

森山が潮音詩社に入社するのは一九五八年四月である。しかし森山は、入社以前から歌を詠み、新聞に投稿していた。

「新聞切り抜き帳」に書き込まれた歌を先に見たが、切り抜きの前にペンで記入された年の見られるものでは「一九四九年主人失業」とある「道遠し」に

失業の波は押しよす我が家にもそゞろ身にしむ秋の夕暮れ  
光明の一步手前で橋壊れ渡らんものとなやむ明け暮れ  
人生は五十からだとはげましつ夫婦手を取り無手の旅へ  
五十路の坂も越したれどなほ路遠くけはしき山も

といった歌がある。「道遠し」は、『布哇タイムス』一九五〇年一月一日に掲載されていて、発表された年月日が確認できるものだが、ペンで「一九五一年八月二十五日」の書き込みがありながら確認できなかったのに「五十過ぎてからビジネスに入る歌」がある。

愛し子の卒業を祝ふレイ縫へば胸はときめき空晴れ渡り  
六人の子女学やの巢を立たせ肩の重みも軽くなりぬ  
人生は五十からだど励ましつ夫婦共々未知の世界へ  
新しき道にふみ込み奥ぞ知る尚ふみ込みて知らんとぞ思ふ  
商いに戸毎\／を訪なへど社会種々相知るが楽しき

年月日の書き込みがありながら、現物にあたることのできないのが幾つもある。あと一例だけ挙げておけば「一九五〇年十月布哇タイムス誌上に」とペン書きが見られる「敬愛する真鶴様へ」がそうである。

森山は、その前に「消え行く古都、首里よ」として「首里市」が那覇市に合併されたことを新聞やラジオで知り、「悲しみの心を拙き歌にしてみました」として二首投稿していた。それを受けて、「まつる」が「消えし『首里』の名を悲しむ 友を慰めて」として四首詠んでいた。「敬愛する真鶴様」は、「まつる」の歌を受けて詠まれたものだが、首里市が那

覇市に合併された記事が『布哇タイムス』に掲載されたのは一九五四年九月七日であった。ということは、「敬愛する真鶴様へ」は、「一九五〇年十月布哇タイムス誌上に」ではなくその後の掲載ということになるのではないかと思える。

そのような記憶違いと思われる記述もあって、現物にあたることのできなかつたのも幾つかあるが、「切り抜き帳」に貼られていないもので分かったのに、一九五三年一月一日「応募川柳」にとられた「かるた会負けて帰りにひげ」、同じく短歌の部に掲載された「掃き清め御花も活けてすがすがし除夜の祈りも心たのしく」等があった。

森山の作品が『布哇タイムス』の「新年応募」に見られるようになるのは、五十三年からである。翌五十四年には「短歌」で「篤農の若者迎へ同胞がつどいはげます此夕べかな」、  
「俳句」に「金色の朝日に浮ぶ島の春」、五五年には「川柳」に「出世して親子の縁が遠くなり」、  
「短歌」に「一つ木に色とり／＼の花咲けり平和布哇の象徴にも似て」等があった。五六年、五七年はなく五八年一月一日には、「朝餉する恋（窓の誤植か—引用者注）に青空晴れ渡り銀色の飛行機雲間ぬい行く」が「新年応募」作品にあり、また「箱根曾遊」の題で掲載された二首があった。

「箱根曾遊」は、森山が帰省した際訪れた地を偲んで歌ったものである。それは、「新聞切り抜き帳」に見られるペン書きになる「一九五五年三十六年振り帰省」五首、「一九五五年故郷に帰り」六首、さらに「一九五六年」六首と三頁にわたって見られる歌と繋がりのあるものであろう。

森山は、そのように潮音詩社に入社する以前から「新年応募」に短歌だけでなく川柳、俳句を投稿し、「歌日記」「旅の歌日記」「折々の歌」と題した短歌を数首ずつ投稿していたのである。

## VI. 潮音詩社への入社

『布哇タイムス』は、潮音詩社の四月例会の詠草を一九五八年五月十六日、同じく『布哇報知』も五月十六日に掲載している。後者には見られないが、前者の四月詠草には次のような覚書が附されていた。

潮音詩社四月例会は二十五日夜ヌアヌ基督教青年会カフェテリアで夕食後会館内で開催、新しく森山静子、寺岡達夫の両氏が加わって他に成、溪月、蘇人、涼雨、まつる、石楠花、浩二、順子、のぶじを合せて十一名、互選後の合評が活発に行はれて十時前散会した、次回五月兼題は『教』

尚潮音詩社では新人を歓迎してゐる、短歌同好者の遠慮ない来会が希望される、どうぞお出で下さい

森山静子が、潮音詩社に加わったのは、一九五八年の四月例会からであることが右の文章から分かるが、一九五八年三月二十四日付『布哇タイムス』潮音詩社二月詠草にはすでに森山の名が現れていた。

潮音詩社詠草への初登場を飾った森山の作品は次のようなものであった。

夕暮れの庭に立ち出で水やりつ水に事欠く他島想はる

一九五八年、森山が住んでいたのはオアフ島。オアフ島が、水に恵まれた島であること、そしてそのような島に暮らしていることが、いかに幸せであるかを歌ったものであった。「水に事欠く」ということは、不自由な生活を余儀なくされるということであった。一世移民たちの困苦を知る世代にとっては、水がないということは、飢餓を連想させたであろうし、心を痛めさせるものがあったのである。それだけに、水が豊かであるというだけでも、幸せを感じたのである。

森山の潮音詩社詠草への初登場を飾った歌は、そのようにある種のオアフ島讃歌とっていいものであった。三月詠草にも「高き家の厨の窓がひろびろと朝夕の眺めシネマスコープ」といった歌がとられていて、これもまたオアフ島讃歌に類するものであった。歌からは、オアフ島での日々を、過不足なく過ごしている様が窺われる。

それは、森山が潮音詩社へ加入したことを知らせる文の見られる四月詠草にとられた一首「紫の菊は笑みかく香ぐはしくあでやかな姫の姿にも似て」といった歌からも伝わってくるが、潮音詩社への加入が、森山の生活をさらに潤いのあるものにしていく。

六月二十日付き『布哇タイムス』潮音詩社五月詠草に見られる次の一首、

歌の会教へ乞はむと出でし席、同好の集ひに心楽しも

同じく六月二十日付き『布哇報知』潮音詩社五月詠草に見られる次の一首、

詩袋の紐とき合ひて味はへばうまさまざさもともに嬉しき

にそれはよく表れていた。「楽しも」「嬉しき」といった二首の結句から分かるように、歌会への参加が、森山の生活を張り合いのあるものにしていった。森山は、謙虚であった。戦後間もなくから歌を詠んで、新聞に投稿していたことからすれば、「教え乞はむ」というのはいささかへり下った言い方にもみえるが、間違いなく教えを乞いたいという気持ちで、入社したのではなかっただろうか。もっと上手く歌を詠みたいという気持ちがあったにちがいないからであるが、しかし一方では、歌の上手、下手など二の次だという思いもあったのである。上手、下手に関係なく、共に歌を詠むことができるのを嬉しく思ったのである。森山が、入社後、例会への出席、詠草の提出をほとんど欠かすことがなかったこ

とにもそれはよく表れていた。

森山が、新しく加わったことを紹介したのは四月詠草の覚書であったが、翌五月詠草には次のような覚書が見られた。

五月三十日が招魂祭当日に当るので翌三十一日に繰上げて仏青食堂に五月例会を開いた、集まったのは達夫、白水、石楠花、八千代、成、睦子、溪月、順子、淑子、涼雨、蘇人、まつる、浮葉、久代、芳子、静子、浩二、のぶじ、別室で夕食を共にし、互選合評のあと吉田幹事から東京の木村捨録氏をハワイに迎えることにつき報告があった、潮音詩社を指導している木村氏（日本短歌社長、月刊誌『短歌研究』発行人兼編集者、短歌同人誌『林間』主宰）が、ブラジルで日本移民五十年祭短歌大会に選者として招聘を受け渡伯しての帰路、七月初旬ハワイに立寄るのでそれを機会に全島の同好者に呼びかけてハワイ短歌大会を開く件、また六月八日夜往路の氏をホノルル空港に迎えて短歌会の打合せをするなど相談し合った、次回六月例会は休み、木村氏を囲む七月例会に合併することになったが、出歌はいつもの通り月末におねがひたし 兼題は「林」

ハワイの短歌壇は、決してハワイだけで孤立していたわけではない。潮音詩社が木村捨録に指導を仰いでいるように、日本の歌壇と密接につながっていた。それはまたブラジル歌壇も同じであったことが窺えるが、その木村が、撰者として招かれた「ブラジル移民五十年祭短歌大会」からの帰路、ハワイに立ち寄るということで、それを機会に「ハワイ短歌大会」の企画が持ち上がったのである。

森山が、例会でその話を聞いてどう思ったか不明だが、間違いなく喜んだといっていだろう。会に加わったことで、そのような「大会」へ躊躇することなく参加できるようになったのだから。

一九五八年八月五日付け『布哇タイムス』は、「木村捨録氏来布記念 布哇短歌大会詠草」として「去る七月六日、木村捨録先生の来布を記念して布哇短歌会がホノルルの仏青会館で開かれた。ハワイ全島から五十首に及ぶ豊富な詠草が集まり、一人一首として木村先生の選を仰いで次の結果を得た」として四十首を掲載していた。

森山の作品は次のようなものであった。

連れ立ちてそゞろ歩きし松林消えて淋しく追憶はるか

歌は、かつて一緒に歩いた松林がなくなっていて淋しい、というものである。この歌だけではあまりよくわからないが、八月八日に掲載された七月詠草の「盆栽の材料探し彼方此方の雑木林に足はこぶ夫」という歌を参照することで、「連れ立ちて」の歌が、かつて夫について「盆栽の材料」を探すため歩きまわった「松林」を回想した歌であったことが

見えてくる。

潮音詩社は、著名な歌人の来布を記念して短歌大会を開催していたが、木村を迎えてなされた大会に続き、翌五九年六月には、「長沢美津女史」を迎えて、第二回短歌大会を開催していた。

『布哇タイムス』一九五九年五月二十六日に掲載された潮音詩社五月詠草には、次のような覚書が見られる。

六月初旬『女人短歌』を主宰する長沢美津女史を米国から帰日の途ホノルルに迎えるにつき、その歓迎とハワイ短歌大会開催の件を話し合つて九時半閉会、次回六月例会は六月四日長沢女史を中心に短歌大会に合流する、兼題は「後」

当夜の出席者は達夫、しげを、石楠花、静子、八千代、迷羊、白水、睦子、正夫、溪月、成、順子、淑子、すなほ、まづる、浮葉、浩二、綺夜女、要、のぶじ

なお六月四日長沢女史を迎えて開く大会は当地の『歩道』『おだまき』の各支部と山峡短歌会、潮音詩社が合同で催すものであるが、これ等のメンバー以外の短歌同好者の参加が希望されている

一九五九年七月十四日付き『布哇タイムス』は、「ハワイ第二回・・・短歌大会入選歌」を掲載しているが<sup>24)</sup>、森山の歌は、次のようなものであった。

充ち足れる生活明るし鼻唄で家事にいそしむ白老婦人

「白老婦人」は、白人の老女をさしての言葉で、彼女の余裕のある暮らしぶりを歌ったものである。「鼻歌」が聞こえるほどの距離ということからして、森山は、白人家庭での日雇い仕事に出ているのではないかと思われる。羨望のまなざしがないわけではない。ハワイはさまざまな人種が寄り集まって生活している島であった。その中で最も余裕のある生活を送っていたのが白人であったことから、早く彼ら・彼女らのような生活を、と移民たちは必死になったに違いないのである。森山は、余裕のある彼女らの生活を歌った歌をいくつか残しているが、その一つに「猫病むと憂に沈む白夫婦慈愛の眼に露さえやどる」（一九六〇年五月詠草）というのがあった。猫の病気に涙することができるのも、余裕のある生活がなせる業であるが、森山に嫉視はなく、その眼は暖かい。

潮音詩社は、月々の詠草を『布哇タイムス』にだけでなく『布哇報知』にも寄せていた。森山の月々の詠草を見ると、同じ歌が、両紙に見られることもあるが、それはごくまれで、ほとんどが別の歌になっていた。

一九五八年八月詠草以降、ほとんど重なる歌がないだけでなく、『布哇タイムス』に掲載された歌とは大分違う感じのするものとなっている。

善意にて悟す言葉も反発に会いてたじろぐ老いの淋しさ

八月詠草の一首である。誰を論したのであろうか。論した相手が誰なのかかわからないが、いずれにせよ相手によかれと思って発した言葉が、思いがけなくも、意に反した反応を引き起こしたのである。そしてそれが「古い」を意識させることにもなったわけだが、森山は、翌五九年の四月詠草でも「善意にてつくせし事が無理解な人の批判にはつとたじろぐ」といったよく似た歌を発表していた。よっぽど気がめいるようなことがあったのであろう。『布哇報知』には、そのような歌とともに、また

素直なる妻ならむと努むれど抗ふことのたまさかありて（六〇年六月二十四日、五月詠草）

うきことも堪えてゆかんと胸ぬちはときにあしもとくずると思ふも（六二年一月二十九日、十二月詠草）

といった歌があった。素直な妻でありたいと思いながら時に意地を張ってしまうことや、辛いことがあっても頑張らねばと思いつつながら元気が出ないといった、意のままにならない心の揺れを歌った歌が『布哇報知』には掲載されていた。

『布哇報知』の詠草と同月に掲載された『布哇タイムス』の詠草を見てみると、

誕生日に夫が贈りし水盤に感謝をこめて花を活けなむ（六〇年、五月詠草）

ひとしをに旅の娘恋し年のくれこのみしものをもとめおくらん（六三年、十二月詠草）

となっている。

『布哇タイムス』に掲載された歌は、そのように夫や娘を歌ったもので、同じ月『布哇報知』に掲載された歌とは、かなり色合いの異なるものとなっていた。

潮音詩社は、『布哇タイムス』へ掲載する詠草と『布哇報知』へ掲載する詠草とを別々にしていたのである。それをどのように振り分けたのか明らかではないが、例会に提出された歌は、会員による「互選」がなされていた。

残された互選資料「潮音詩社 一九六五年四月詠草 一九六五」を見ると、詠者名なしで番号だけが振られた歌が並んでいる。番号は、書きうつした人が振ったにちがいない。番号だけで記名のない互選資料から森山の歌を抜き出すのは難しいことではない。「四月詠草」を掲載した両紙を見ると、森山の歌は、

37 隣接の文化アパート完成し人種の垣塙見るも美わし

38 ゼエール花さきそめにけり庭ぬちに名に相応しき色形して

の二首であることが分かる。

森山の歌の37には、1の数字、38の歌には数字がない。37の歌には、一人の推薦者がいたのに対し、38の歌は一人の推薦者もいなかったということなのだろう。ちなみに最高の数字は11、その後に8、7、6、5、4、3、2、1と続き数字の記されていない歌が森山の一首の他に五首ほどある。互選資料に見られる歌の総数は四十四、一人二首ずつで二十二名の提出者がいたわけであるが、その日例会に出席していたのは十四人に他一人、他一人は「何年ぶりか」の参会者で、互選に加わったかどうかはわからない。

森山の一首の他に五首数字のない歌が見られるというのは、互選が、なかなかに厳しいものであったということだろうか。森山の歌に目を止めた会員はほとんどいなかったにも関わらず、森山はめげずに例会に参加している。

## Ⅶ. 潮音詩社の活動

潮音詩社は、月例の詠草集を掲載するにあたって、その前に月例会の開催場所、会員の消息、活動の予定、定例会の曜日変更、出席者の名前、兼題の予告等を出していた。木村捨録や長澤美津女史を迎えて布哇短歌大会が開催されたことなど、詠草集の前に記された覚書に見られるもので、それは潮音詩社が他の短歌会と共催で行った大きな活動と言えるものであったが、社のメンバーだけの活動としては、月例会の他に野外での詠草会などがあつた。

一九六〇年七月十八日に掲載された六月詠草を見ると次のような覚書が見られる。

快晴の天気にもぐまれて潮音詩社同人一同打揃って久しぶりの行楽である。六月十二日のサンデーの朝十時、集合所の曹洞宗別院前から四台の自動車に分乗して向つたのは裏オアフのライエ米人富豪B家の別荘は白砂のつづく海岸にあつて眺望絶佳早速持参のランチを開いて楽しい昼食をすませ、歌会は互選だけにとどめて、あとはゆっくり外の空気を味わうことにした。男たちには海水に浸るものもあつた。一同心ゆくまで一日の行楽に興じ、B家の厚意に感謝しつつ帰路についたのが四時、参加者は達夫、しげを、静子、迷羊、溪月、静観、涼雨、まづる、浮葉、清二、多江子、綺夜女、久代、古谷、のぶじの十五名。

なお次回七月兼題「洗」に次いで八月は「終」

潮音詩社は、そのように時に会員で行楽を楽しんでいたし、静子も積極的に参加していたのではないかと思える。行楽には、静子だけでなく静観、まづるといった沖縄出身者の同人たちも参加していることがわかる。ちなみに覚書にみられる沖縄関係者では次のような名前が出て来る。

潮音詩社二月例会は二十日夜、日商工食堂で夕食後開いた。飯田富士子、柳美枝、

浜望天など新顔のほか、比嘉栄子氏を加えて二十一名の出席でにぎわった。（一九六二年四月十一日、二月詠草）

当夜は賓客として鈴木領事夫人、白木屋の石渡支配人夫人、また出府中のヒロ銀雨詩社同人夕川寒月氏を迎えたほか、新入会の安慶名蕉風氏が初出席した。（一九六四年二月二十日、新年詠草）

当夜は主張中のヒロ銀雨詩社の又吉全興（南郷）氏を迎えてにぎわい互選合評の席に“オブザーバー”として加わってもらった。（一九六五年十一月十五日、十月詠草）

潮音詩社では去る十三日、恒例の野外詠草会を開いた。ヌアヌ・パリ裏緑に包まれたクック家のお邸を借りて、裏オアフの山々と海を見渡ししながら、この快い集いをもつことができたのは、同家にお勤めの幸地氏夫妻のごあっせんによるものであった。芝生の上で持参の弁当を開き、幸地夫妻のおもてなしを受けつつ互選に移る。（一九七一年八月三十一日、六月詠草）

比嘉栄子は比嘉春潮夫人で歌人、比嘉がハワイ大学東西文化センターの招聘研究員として滞在中であったことから栄子もハワイにきていた。静子の「新聞切り抜き帳」に、写真入りの栄子の「夏過ぎて」と題して詠まれた十首が切り抜かれて貼られているのは栄子が東京の歌壇で活動している歌人であることを知っていたからであろう。又吉全興は、ヒロで開業していた医師で、作家宮城聡が改造社の雑誌編集者としてハワイに渡って来たとき面倒をみたばかりでなく、宮城が新人作家として登場するまで経済的な応援を惜しまなかった人である。幸地氏は、山峡短歌会に属し、後『ハワイパシフィックプレス』歌壇の常連として数多くの歌を発表していく幸地南枝であろう。

潮音詩社詠草の覚書はそのように沖繩関係者の参加や協力について触れていた。そして静子は、栄子、又吉、安慶名が参加した例会には勿論のこと、幸地夫妻が接待した行楽にも参加しているように、よほどのことがない限り例会への出席を欠かすことはなかったのである。

覚書には静子自身に関する記事もちろんいくつかある。その一つに「米大陸から帰った静子」（一九五九年四月十一日、三月詠草）というのがある<sup>29)</sup>。入会以来詠草を欠かしたことがない森山の名前が、一九五八年の十一月詠草、一九五九年二月詠草に見えないのは、「大陸」に行っていたためであった。

## VIII. 『レイラニ』の刊行

潮音詩社は、一九六三年十一月五日合同詩集『レイラニ』を刊行する。合同歌集に関する記事が現れるのは七月十五日に掲載された五月詠草覚書からである。

二十八日の夜、五月例会を日商工食堂で開いた、合評を行う前に、合同歌集出版について打合せを行った、溪月、淑子、涼雨、成、まづる、順子、静子、しげを、綺夜女、達夫、七重、とみ子、直世、浩二、のぶじの十七名、ほかに当夜ヒロより出府中の大久保うまきち氏が参加した

五月例会のときに話し合われた合同歌集について、その後、八月の例会で「目下東京で進行中」で、「十、十一月中に製本が出来上がる予定である」という報告があり、九月例会で「歌集『レイラニ』の最終的打合せを」行ったこと、十月例会で「進行中の合同歌集についての報告を幹事から聞いた」こと、十一月例会で「近く日本を発送のはず」だという幹事の報告、十二月例会では「日本から空送された合同歌集『レイラニ』の見本を胸をとどろかせながら批評しあった」とあって、合同歌集に関する記述はそれで終わる。合同歌集には二十九名の作品がそれぞれ二十首ずつ収録されている。森山の作品は、次のようなものであった。

- ① 転転と職も住まいも落ちつかぬ若き日もあり追憶の中
- ② 眼裏に滲む涙おさえ居て笑顔に看とる夫の枕辺
- ③ 病む夫に代りて水やり今日もまたうれいにくもる夕せまる庭
- ④ ようやくに死線を越えて再起せる夫は静かに庭いじり居る
- ⑤ ひもすがら土に親しむ庭ぬちに悠々自適の夫の安らぎ
- ⑥ 連れ立ちてそぞろ歩きし松林思いはるかに椰子の島かけ
- ⑦ 事々に老化兆しを見すれども盆栽いじる夫若々し
- ⑧ 逞しき盆栽の松くねくねと雨に打たれて目に染む青さ
- ⑨ 素直なる妻であらむと努めども坑ふことがたまさかにあり
- ⑩ 最高の学成り終えて輝ける吾が子の面をレイうめてゆく
- ⑪ ハッピーマザスデー長距離電話の娘の声に我は涙にかきくもりけり
- ⑫ 子等は皆親にまされる生活しぬつつましき座の母に悔なし
- ⑬ 別れぎわ口に手をあて投げキッスあどけなき孫に愛しさましぬ
- ⑭ 古郷の老母を迎えて安らぎぬ孫に囲まれて充つるその面
- ⑮ 耳遠き母につかえていつしかに声高くなるくせのごとくに
- ⑯ 老いの日々耐えねばならぬ責め重くたぢろぐことのありて恥らう
- ⑰ 海越えて送りたいまいし黒花器に花を生けなむ友しのびつつ
- ⑱ 春空にマンゴの花が咲き満ちて豊かなる明日待つは楽しき
- ⑲ マンゴの実たれさがりたる下をゆき今日も取られぬ我がヘヤネット
- ⑳ 籠の鳥死せるまわりを白き蝶しきりに飛べり妖精のごとく

二十首のそれぞれの掲載年月日を記しておけば、

- ① 一九六二年三月二日一月例会詠草，布哇報知（以下報知と表記）
- ② 一九六一年十月二十三日八月詠草，布哇タイムス（以下タイムスと表記）
- ③ 一九六一年七月十二日六月詠草，タイムス
- ④ 一九六一年八月七日九月詠草，タイムス
- ⑤ 一九六二年一月二十五日十一月詠草，タイムス
- ⑥ 一九五八年八月五日，木村捨録氏来布記念布哇短歌大会詠草，タイムス
- ⑦ 一九六〇年十月十八日九月詠草，報知
- ⑧ 不明
- ⑨ 一九六〇年六月二十四日五月詠草，報知
- ⑩ 一九六〇年九月十七日八月詠草，報知
- ⑪ 一九六一年七月六日五月詠草，タイムス
- ⑫ 一九六二年四月十四日三月詠草，タイムス
- ⑬ 一九五九年十一月十三日十月詠草，タイムス
- ⑭ 不明
- ⑮ 一九六二年五月三日四月詠草，タイムス
- ⑯ 一九六二年十月二十七日九月詠草，タイムス
- ⑰ 一九六二年八月十一日七月詠草，タイムス
- ⑱ 一九六三年三月十一日二月詠草，報知
- ⑲ 不明
- ⑳ 一九六三年五月二十五日三月詠草，タイムス

となる。

不明の三首を除けば、すべて潮音詩社詠草からとられているが、合同歌集に見られる歌は、⑳以外、初出のままではなく、大なり小なり手直しされていた。

例えば③だが、初出は「夫に代り水やり乍ら病む夫をけふも憂へり夕庭の中」となっていた。初出と③を比べれば、一目瞭然だが、合同歌集収録にあたっては、そのように直されていたのである。添削は、合同歌集収録にあたってなされただけでなく、多分新聞掲載にあたってもなされていたに違いない。

森山の歌の多くは、その添削によって歌らしくなっていったのではないかと思われる。それだけに合同歌集に名を連ねることが出来たことを森山は人一倍喜んでに違いないのである。

合同歌集レイラニに連なりて歌人めきしを面映ゆくいる

六四年四月十五日『布哇報知』に掲載された三月詠草に見られる一首である。

合同歌集にとられた歌は、盆栽を趣味にした夫を歌った歌を中心に、子供や孫そして母親のこと、自分と自分の身の回りのことを歌った歌が集められていた。森山の歌の世界は、いかにも狭い。

『レイラニ』刊行後の一九六四年から潮音詩社の詠草が新聞紙面から消える一九七三年までの森山の歌を追っていくと、「椰子並木ゆるる浜辺に白波の寄するを見つつハワイカイ清し」（一九七〇年十一月二十四日、九月詠草、タイムス）といったようなハワイの景色を歌った歌を筆頭に、「隣接地にブルドーザーは音高く束の間倒す家も立ち木も」（六四年六月十六日、五月詠草、タイムス）といった急速に進むハワイの開発、「願望の立州なりて島民の歓喜漲るパラダイス・ハワイ」（五九年五月十五日、四月詠草、タイムス）、「隣接地にアパート立ちて独立際は爆竹鳴らしあたり悩ます」（一九六六年八月八日、七月詠草、布哇報知）といったハワイの立州や独立際、「核停の条約成るのニュースあり世界平和の明るき兆し」（六三年十月八日、八月詠草、タイムス）といった世界的な話題、そして「移民百年日系の子孫栄えつつ世界に羽搏く時は来れり」（一九六八年二月七日、新年詠草、タイムス）といったハワイ移住記念式典を歌った歌などがあって、個人的な出来事以外にも関心がなかったわけではないことがよく分かる。しかし、そのような類の歌はそれほど多くなかった。もちろんそこには、森山の力量の問題もあったに違いない。

#### Ⅸ. 詠草掲載の休止

『布哇報知』は、一九七三年十二月十日「お願い」として社長名で次のような社告を出していた。

新聞用紙の不足はますます状態が悪くなって参りました。現在のような状態を放置すれば、来年度の新聞紙事情は、これまでわれわれが経験したこともないような状態になりかねない様相を示しております。

このような予想に対応するため本社では、六頁建て新聞を出しておりますが、八頁を六頁にしても、報道すべきニュースは絶対に落さないようにするということが編集局の大きな責任となり編集局でも非常に苦心しております。

このような状態にありますので『お知らせ』『日曜聖集』『投書』その他のものでもこれまで通りの紙面を割いて行くことが困難になって参りました。

つきましては、まことに恐縮ではありますが、これまで以上に、すべてを簡単に要約してご投稿下さるようお願い申し上げます。

なお本社編集局で御投稿の一部を削除訂正することもあるかも知れませんので、予めお断り申し上げます。

新聞用紙不足が緩和される見通しは現在全く見えておりません。あらゆる努力を傾けてどんな状態に陥っても新聞発行を続けて行くことを目標に、本社では準備体制に入りました。皆様のご協力の程お願い申し上げます。

一九七三年十二月十日

ハワイ報知社

社長 円福昭道

潮音詩社詠草の掲載は、「お願い」が出る前から遅れがちになっていて、七三年の十一月二十七日に九月詠草が掲載されるというように、かつてひと月遅れであったのが二か月遅れになっていた。それでも『布哇報知』は、七三年の十一月まで掲載していたのであるが、『布哇タイムス』は、一年前の一九七二年十月二十四日の七月詠草を最後に、掲載をうちきっていた。

森山七月詠草および九月詠草は次のようなものである。

長閑なる磯辺に立てば白波に思ひは遙か若かりし頃（七二年十月二十四日、七月詠草）  
ラジオより古里の歌きく毎に思ひは遙か若き日のこと（七三年十一月二十七日、九月詠草）

二首の間には一年の隔たりがあるが、まったく同じ感慨が歌われていた。それは偶然と  
いっていいが、故郷を思う事が多くなっていたのであろう。そしてそのようなよく似た歌  
が表れてきたことで森山の活動も終わりを迎えつつあったようにも見える。また「新聞用  
紙の不足」というのっぴきならない事情による詠草の掲載中止がいよいよそのような思い  
を深くさせるが、潮音詩社の活動は、依然として続いていた。

『レイラニ』に続く潮音詩社の合同歌集『レインボー』が刊行されたのは一九七八年  
十一月三日である。収録人数二十六人、一人あて二十五首、森山も「日々」の題で二十五  
首を発表していた。森山の作品の内訳は、一首だけ『レイラニ』以前の作品で、それ以後  
詠草の掲載が中止になるまでに詠まれた歌が七首、残りの十七首はその全部ではないにし  
ても詠草の掲載が見られなくなった後から『レインボー』が編集されるまでの間に詠まれ  
たに違いないものである。

『レインボー』に収録された歌は「若き日の夫の写真はほほ笑みて強く生きよと励まし  
を言ふ」という亡き夫を歌った歌にはじまる。相変わらず夫を歌った歌が多くみられると  
同時に「病み伏せば老いの坂道けはしくも子等の温みによみがへるなり」といった自らの  
老いを歌った歌そして「子等は皆正しき道を歩みりを生命のかぎり見守りゆかむ」といっ  
た辞世ともとれるような歌を収録していた。合同歌集『レインボー』が刊行された時、森  
山は八十歳を迎えていた。

一九八六年八月三十日には、官約移民一〇〇年を記念して『官約移民百年記念ハワイ詩歌集 DOVE』が刊行される<sup>26)</sup>。詩歌集は、「潮音詩社短歌会」「をだまきハワイ支部」「山峡短歌会」「ホノルルゆく春会」「ヒロゆく春会」「コナゆく春会」「ハマクアゆく春会」「『あざみ』ハワイ支部」「ハワイ俳句会」「苦楽社」の十社に「一般応募作品」から「現在ハワイ在住の文人、既に他界された諸先輩の代表作品を一冊の本に纏め」たもので、森山の作品も一首「子等は皆正しき道を歩みをり生命のかぎり見守りゆかむ」がとられていた。森山の代表的な作品とみられたのであろう。

## X. おわりに

一九七二年五月潮音詩社は五〇周年を迎える。一九七二年三月二十七日付き『布哇タイムス』は、潮音詩社一月詠草を掲載してその覚書に「潮音詩社は今年五月をもって創立満五十周年を迎えるので、来たる六月を期してその記念会を催す」と記していた。

潮音詩社の歴史については、一九六一年一月一日付き『布哇タイムス』の「日系文化に一役 布哇文芸結社めぐり 四十年のたゆまぬ歩み 潮音詩社」に詳しい。それによると、一九二二年五月十五日、浅海青波の歌集出版会が開かれた際、「この会合を機会に短歌会をつくり毎月集まることにしたら一との提案があつて、直ぐ様当夜の出席者を会員として発足することになった」という。会の名称は、浅海の歌集『海潮音』にちなんで「潮音詩社」とし、爾来四十年、総合文芸誌『カマニ』、同人歌集『夜開花』『布哇歌集』を刊行、「現在三十名の同人を有する」といい、「文芸人の結社として半世紀へ歩みをつづけようとするのは、海外に余り例がない」と紹介していた。

その「海外にあまり例がない」歩みを、一九七二年の五月に迎えたのである。

森山は、潮音詩社の五十周年にちなんで、次のような歌を詠んでいた。

手を引かれ教はりながらあゆみ来て五十年記念をともに喜ぶ（七二年七月十八日、五月詠草、布哇報知）

潮音詩社の五十年をともに先輩のひたすらの愛に心をうたる（一九七二年七月二十九日、布哇タイムス）

森山が潮音詩社の例会に初めて参加したのは一九五八年の四月からであった。そして四十周年記念、五十周年記念とともに歩んできただけでなく、やむなく欠席した二度、ロス行き、夫の看病期間を除いて、ほとんど欠かさず出席し、詠歌を提出していた。

森山の世界は、夫を歌った歌を中心に、息子、娘、孫たちそして母や隣人たちであり、しかもそれらの歌は、「下手」だとしか言いようのないものであった。

森山は勿論そのことをよく知っていた。森山は、

下手ながら心の支えの歌の道に毀誉褒貶に我こだわらず（一九六六年十二月二十九日十一月詠草，タイムス）

と、詠んでいたのである。

森山は、歌を詠むことで、辛い仕事や煩瑣な関係に耐えることが出来たし、救われた。

拙なけれど歌詠む趣味にすくはれて心慰やする倖せを思ふ（七一年五月十二日，三月詠草，報知）

沖繩からの移民たちがさまざまな局面で苦勞したのはよく知られている。日々の暮らしの辛苦もさりながら、郷里の窮乏を思い心痛める日々もあったのである。森山は、歌を詠むことで心を癒した。歌を詠む趣味に救われたというのは、森山の偽らぬ思いであったとっていいだろう。

## 注

- 1) 當間しせいの名前が、一九五八年三月二十四日付き『布哇タイムス』「潮音詩社 二月詠草」には見られる。當間しせいは「山峽短歌会」会員。
- 2) 比嘉は、潮音詩社創立（一九二二年）以来の会員，大嶺は戦後参加。「一世日本人の文芸と著作」『五十年間のハワイ回顧』（相賀溪芳，一九五三年十一月刊）。比嘉は「コナ銀雨詩社」，大嶺は「山峽短歌会」の会員でもあった。
- 3) 「安慶名良信」『がじまるの集い 沖繩系ハワイ移民先達の話集』（崎原貢，一九八〇年十月三十一日刊）。「歌集」について安慶名は「この歌集は殆ど自作でまとめて見た後十年も立てばもつと立派な作もあると思うが「風向きばかり気にしていると種を蒔くことも出来ないし又収穫も出来ない」との古語があるので元気な時にまとめておいたのがこの幼稚な歌集である 一九八一年六月二十日（父の日）良信」と記していた。
- 4) 草分けの困苦の足跡輝きて寿ぎ祝ふ七十五年史  
遅れ走せ植たる琉球民草が榮ふ咲きたり忍（以下不明）
- 5) 女夫して歌で通はず愛の泉み今はあの世で共に汲むらんなす事を多く残して去りませし友の最後が傷はしきかも憂き事も笑顔で忍ぶ君なれど力つきてか限りある身に
- 6) 愛し子に学びの道を授けんと老し我身にむち打ち励む  
嘗故に□き夕空もいとなく出て行く夫に感謝ささげん  
いましばし勤め励めと慰めつ子等の未来に幸あれかしと  
絶へて久しきピクニックカハラビーチの集い嬉しく  
老も若きも綱引けば故里の十五夜思ひ出さるゝ  
酔いて寝そべるカナカ女を見れば理想なき民族の末路淋しく

- 7) 掃き清め御花も活けてすがすがし除夜の祈りも心たのしく
- 8) 危ないの声に孫がなほ走り  
走り来て過ぎ去るバスを恨めしく  
電話ベル小さき孫が走り行く
- 9) 災難に一時しほれた夫なれどペントぬり\／なごむ口笛  
帰る日を待ちにし老母病と言ふ羽なき鳥は唯祈るのみ  
次々になやみ重なる此の日頃神の試練と受けて勤めん
- 10) 人生は五十からだとかんばれど、病みて伏す身のあわれなるかな  
大手術受けて死線をさ迷ふ床に、子等かこみ居る涙浮かべて  
手術後のまださめやらぬ夢うつつ、憂げにかこむ友顔々  
常日頃言葉荒き背の君も面やつれ見ゆ我を憂ひて  
病伏して人の情の身にしみぬ、日々の見舞いと厚き恵みを  
今日我は再生けり恵みを受けて、天津御神に感謝捧げん  
再生の悦びみちぬ大空に意義深く生き残る余生を
- 11) 久しうに打捨ておきしノートブック又取り上げて学ぶ此の頃  
責任のかかるくなりたる老いの身をせわしく生ん意義ぶかく  
現世に永らへる間は励みなん趣味にたしなみ祈る気持ちで  
婦人会老いも若きも首里揃て生活忘れて和む半日  
故郷の美德引つぎアロハ島首里集いて親和嬉しく  
原爆恐ろし  
人類の末路近づく思ひする、人智行き過ぎなやむ皮肉さ  
神の民なぜに災難打ちつづく摂理なりせばあまり惨はし
- 12) 由緒ある故郷の首里市失しと報ず 信じともなし淋しき心  
嘆くらむ草葉の陰で御先祖が たとい時世の犠牲なりとも  
ふるい立て首里の若者名を残せ 寅は死すとも皮残す
- 13) 災難に倒れし友も再生り趣味に親しむ今日嬉し  
消えし名を惜しみて嘆く心くみ慰め給ふ友のやさしさ  
嘆いても時世の変りすべもなし那覇と結びて太くのびなん  
首里の名は消えて失くとも美德つぎ首里揃いて那覇と進まむ
- 14) 嘆きけり女浦島里帰り町は淋れて我が家も消えて  
最後迄耐えしと聞きし屋敷跡残る井戸端に父母忍び泣く  
母の御手ふれしと思ふつるべにて水汲み上げて祈るも悲し  
墓に詣て額づく場所もなし草ボー\／と爆弾の跡  
主人なき古城の跡に佇めば唯傷跡の残る悲しさ  
宮人の気高く住みし城跡も時世の流れ停車場となる

- 那覇の町表通りの賑やかさハンマの音に民ふるい立つ  
かにかくに表玄関現代化のぞく裏には胸せまるもの  
幸うすき我が古里を救いませ大津御神に祈りてやまぬ
- 15) 正義の士逝きませり急然と 輝く命の終りかざりつつ  
神の御手、さしのべられて天国で 永久の安らぎ君待ち給ふ
- 16) 顧みるよはいと言はれ夫のぞく 面にきざむ過去のきびしさ  
きびしくも遙か彼方にとび越へて 静かに暮れる庭いじり居て  
名もなさず落ちぶれもせず平凡な 過去に悔なく生きる安らぎ
- 17) ヌアヌ谷寒々として雨けぶるかつて遊びし箱根思はる  
さら／＼と流るゝ小川の音にさえ鬼怒川の湯に思いあらたに
- 18) 初産の旅の娘母恋うと書く  
惹かれ旅立つ寒さに向い  
夫子等に見送られてとぶホノルルを  
覗く窓には雲の波々  
エンジンの雑音つゞき寝ねがたく  
閉ずる臉に雑念のうづ  
機上より眺むる朝日美しく  
色鮮かに雲間より出づ  
霧深く降りるすべなく三時間余を  
くる／＼廻るロス市の上空  
ようやく着陸タラップ降り立てば  
身重の我娘迎へ抱きぬ  
娘の住む町静かなる町郊外に  
白黄黒と平和境なり  
永久しへの平和祈らむ初日の出  
霧深きロスの旅の空にて三十五年振りに従兄に再会  
音ずれの絶へて久しき従兄君の  
御声懐し受話器のかなかた  
きびしさの過去の暦は切り捨てゝ  
趣味に祈りに生る従兄嬉し  
三十五のへだたり持ちて共に老ふ  
懐しさ増しぬ血のつながりは
- 19) 大空に白線えがきとびまわる飛行機に見入る我を忘れて  
真白きガウン美しく嫁ぐ娘に愛惜しばし祝意の中に  
小夜更けてふと目ざめたる寝夜の窓青光り射す秋の夜の月

白々と夜明けの月に夢やぶる我が越し方のあまき追憶

- 20) 郊外にヅライブはよし若やぎて唄いたくなる胸のふくらみ
- 21) 民主主義象徴しめさる若き皇子瑞穂の国わいや栄えらむ  
永久しえの御繁栄結ばる吉日かな祝奉らむ遥かの布哇
- 22) 立州を告げる鐘なる窓開けて、歓喜の祈り帰化の民我も  
宿望の立州なりて島人の歓喜漲るパラダイス布哇
- 23) 病む夫の看病りに家事に追はれ居て  
雨季乾季すぎ春の足音  
咲きほこるマンゴの花が  
突風に  
吹き荒らされて  
耐え咲き残る  
人生も花も実もある安らぎに  
突風吹くとも耐えて咲かん  
幸なりや良き友々に囲まれて  
子に支えられ日々の安らぎ
- 24) 参加者四十名余、作品四十一首、長澤美津選で「入選歌と佳作」の発表がなされているが森山の作品は「選外佳作」の中に見られる。
- 25) 一九六七年十二月二十五日に掲載された「十二月詠草」覚書には「今秋明治神宮で開かれた明治記念総合短歌大会で、ハワイから佳作一の部に松井右衛門、佳作二の部に田村すなほ、比嘉静観、森山静子ら四氏の作品が入選した旨、吉田幹事から発表された」、一九六九年十一月二十四日に掲載された「十月詠草」覚書には「久しぶりの静子氏が顔を見せて」、一九七二年一月七日に掲載された「九月詠草」覚書には「静子が欠席」といったような報告がなされている。
- 26) 『DOVE』には、大城丈治、豊川走川、嘉数南星、森山静子、比嘉静観（以上「潮音詩社」）、仲宗根扶佐枝（「をだまきハワイ支部短歌会」）、當間嗣栄、當間しせい、大嶺まする、幸地暁雨（以上「山峡短歌会」）、安里しげ子、知念紀予女、大見謝信子、當間嗣栄、玉代勢鼓山、比嘉静観（以上「ホノルルゆく春会」）、池原順子、本永きよみ（以上「ヒロゆく春会」）、大城丈治、高江洲一二三、（以上「自由律ハワイ俳句会」）、大城丈治、當間嗣栄、當間しせい、玉代勢煙波（以上「川柳苦楽社」）といった名前が見られる。

（なかほど まさのり・琉球大学前教授・沖縄文学）